

## 令和5年度 第1回神戸の子ども居場所フォーラム

### ～子どもが外遊びできる協働の居場所づくり～

日時：令和5年12月28日

開会 午前10時01分

○江坂課長     それでは定刻が参りましたので、ただいまから令和5年度第1回神戸の子ども居場所フォーラム～子どもが外遊びできる協働の居場所づくり～を開催させていただきます。

私は、地域協働局地域活性課課長の江坂と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

本日はウェブで御参加いただく出席者がおられますが、円滑に議事が進みますよう努めてまいります。御協力のほどよろしくお願いいたします。

また、本日のフォーラムは公開のため、会場にて傍聴されておられる方々がいらっしゃいます。

それではまず最初に、出席者の皆様を御紹介させていただきます。なお、自己紹介を兼ねた活動紹介に関しましては、後ほど議事にてお願いいたします。

子どもの遊び環境などを研究されておられます、神戸女子大学家政学部家政学科教授、梶木典子様です。

○梶木座長     どうぞよろしくお願いいたします。梶木でございます。

○江坂課長     なお、梶木様には本フォーラムの座長を務めていただきます。

須磨区の八幡神社、鎮守の森などで森の幼稚園をされており、一般社団法人森のようちえんすまっこのもり代表理事、澤井一沙様です。

○澤井氏     澤井です。よろしくお願いいたします。

○江坂課長     灘区、一王山町十善寺内の茶屋の女将であり、一王山の自然を生かした地域活動をされており、豊永祐子様です。

○豊永氏     豊永と申します。よろしくお願いいたします。

○江坂課長 次に、ウェブで御参加いただいております方を、御紹介させていただきます。

地域のまちなか広場作りに関わっておられます、全国まちなか広場研究会理事、山下裕子様です。

○山下氏 山下です。よろしくお願いいたします。オンラインで御無礼いたします。

○江坂課長 なお、灘山公園などでプレイパークを開催されております。特定非営利活動法人Spaceの越智理事長におかれましては、当日開始時刻までにZOOMにご入室いただかず、フォーラムの事務局の円滑な進行のため、開始後の対応が出来ず、ご欠席となりました。

続きまして、行政からの出席者を御紹介させていただきます。

神戸市こども家庭局、丸山副局長です。

○丸山副局長 丸山です。よろしくお願いいたします。

○江坂課長 神戸市教育委員会事務局、芝田教育次長です。

○芝田次長 芝田でございます。よろしくお願いいたします。

○江坂課長 本日はどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、主催者を代表いたしまして、久元喜造神戸市長より、本フォーラムの開催に当たって一言、御挨拶させていただきます。

○久元市長 神戸の子ども居場所フォーラムを開催するにあたり、この参画をお願いいたしましたところ、お忙しい中お引き受けをいただきまして、また今日は御用納めというギリギリのときに開催をいたしましたけれども、御出席をいただきまして、ありがとうございます。

どういう問題意識で、このフォーラムをお願いすることになったのかということ、少しお話をさせていただきたいと思いますが、子どもたちは物心がついてから、大人になるまでの間、成長過程の間に、どういう場所でどういう時間を過ごすのかというのは非常に大事です。

家庭の中、それから学校は、これはそれぞれ保護者や家族、また学校の先生方の目が行き届く中で時間を過ごすわけですけれども、それ以外の時間にどんな場所で、どう過ごすのかということ、これはやはりしっかり議論する必要があるのではないかと、いうふうに、今感じていました。

最近起きている客観的な状況、これは客観的と言いましても、主観も入りますので、そこを含めてお話をしたいと思うのですが、やっぱり保護者や社会全体の中で、子どもの安全な場所で、家庭や学校以外でも時間を過ごすことができるような要請というのは高くなっているように思います。

小学生などの学童保育の場所をしっかりと作ってほしい。神戸は全国的に見ても児童館が非常に充実している都市ですけれども、そういうところで安心して、子どもたちに時間を過ごさせてほしい。特にテクノロジーが最近、非常に発達をしていますから、子どもたちをしっかりと把握をして、特に保護者の方や、学校にもそういうニーズがあるかもしれませんが、安全に時間を過ごしているのだろうか、うちの子どもはちゃんと安全なところにいるのだろうかということを確認したいというニーズが、非常に高くなっているというふうに思います。

客観的に見たら、刑法犯の認知件数というのはものすごく減っておりまして、客観的な安全度というものは、非常に高くなっているのですけれども、しかし同時に凶悪事件が報道されるたびに、不安が非常に高まるということもみられます。客観的な安全度というものは高まっているけれども、主観的な安心ということについては、このようにかなり懸念が呈されるということが、1つ言えると思います。

もう1つは、子どもたちの体力が明らかに低下しているということです。これは後ほどまた報告があろうかと思えます。これは神戸でもそうです。全国的に見てもそうですね。このことが、どういう原因なのかということは、必ずしも科学的に明らかにされていないのですけれども、やっぱり子どもたちの時間の過ごし方ということも、かなり影響しているのではないかと、いうふうに思います。

その一方で、これは私の意見も入るのですけれども、ずっと昔からの、あるいは普遍的なテーマとして存在している課題は、人間は大人になっても子どものときもそうですけど、大人になっても危険を察知し、危険を回避し、あるいは場合によっては危険と戦う能力というのが、生き抜いていく上で必要ですが、これは成長過程において、子どもたちがその危険と遭遇することによって、獲得される能力ではないかと思えます。

ここに非常に大きなジレンマがあって、子どもたちに危ない目に合わせてはいけないというニーズと、同時に多少危ない目に遭わないとそういう能力を獲得されないという、このジレンマをどう克服するのかというのは、延々ずっと恐らく人間が昔から取り組んできたテーマではないか。

ここに今起きているような社会の変化、あるいは子どもたちに対する子どもたち自身の意識や、あるいは保護者やあるいは子どもたちに関わる学校現場など、そういう方々の認識の変化の中で、この問題をどういうふうに向き合って、最適な答えはないかもしれない、どう対応していったらいいのか。

そして神戸市政はこの学校教育の現場、あるいは学童保育の現場、子どもたちがよく遊ぶ公園のあり方、それ以外にも様々な地域と関わっているわけで、そういう子どもたちの居場所を考える上で、神戸市政というものが、どう向き合ったらいいのかということは、これは市政の中でも非常に大きな問題ではないかという、そういう問題意識で、今回自由に議論をしていただきたいと。

神戸市のこういう外部の先生方に入っていたいただいた検討委員会は、以前は先生方こういうメインテーブルに座っていただいて、後ろに事務局がいて、事務局は事務的な発言しかしないということが多かったのですけれども、最近はこの役所の幹部も同じテーブルに座ってもらって、できるだけ自由に発言をしてもらいたいなど。事務局と書いていますが、増田局長のような幹部の皆さんもこうして後ろにいるわけですから、ぜひ自由に発言をしてもらって、これは絶対正しい答えがないテーマなので、

役所の皆さんも自由に発言していただいて、そしてそれぞれの立場から、御自身で体験されてこられたこと、あるいはお考えになってこられたことを、自由に発言をしていただいて、有意義な意見交換を行い、何らかの成果をこのフォーラムから出していただければ、大変ありがたいと思っております。

どうぞよろしく願いいたします。

○江坂課長　それでは、ここからの進行につきましては、梶木座長にお願いをしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

○梶木座長　皆さんおはようございます。御指名いただきましたので、ここからの進行を務めさせていただきたいと思っております。

本日は、先ほど市長からのお話にもありましたように、皆さんの意見を自由にということですので、ぜひざっくばらんな感じでよろしく願いいたしたいと思っております。

市長もずっと一緒にいていただけるということですよ。

○久元市長　はい、そうです。

○梶木座長　では、皆さんの自由な意見をお聞きいただくということで、では進めてまいりたいと思っております。

まず初めに、本日は子どもの居場所、体力低下の現状について現状報告をこども家庭局から、御説明いただきたいと思います。

丸山副局長よろしく願いいたします。

○丸山副局長　それでは私のほうから、神戸市の子どもの居場所について御説明をさせていただきます。

まずは子どもに関するデータを御覧ください。画面のほうで共有していただきます。

まずグラフを御覧ください。子どもに関するデータを御紹介します。出生数の年次推移になっております。全国も神戸市も、第2次ベビーブーム以降、出生数が減少し続けておりました、神戸市では2020年に1万人を切り、9,196人となっております。

次は、18歳未満の児童が1人以上いる世帯といない世帯の人数推移で、全国調査の結果です。児童がいる世帯は黄色の部分ですが、1986年から2022年までの26年間で、約30%の減少となっております。

次は、共働き世帯の年次推移です。こちらも全国調査で、1980年から2022年の約40年間で、共働き世帯が倍増して全体の7割を超えているような状況です。

こちらは、児童のいる世帯の母親の就労状況です。先ほどの共働き世帯が増加しておりますので、就労している母親も増えております。

ここまで見ていただいたように、子どもの数は減少しておりますけれども、保護者が働きながら子育てをする世帯が増えているというような状況で、こういった子育て世帯の生活状況を踏まえて、子どもが安心して過ごせる環境づくりの1つとして、神戸市では子どもの居場所づくりに取り組んでまいりました。

まず、居場所の紹介の前に、参考に子どもの権利条約について触れさせていただきます。1989年に国際連合総会で採択された子どもの権利条約には、4つの権利が定められておりまして、特に最下段に書いてありますが、第31条において、子どもは年齢や体力に応じて、勉強、遊び、休息、これらを自由に選択できる権利を持つとされております。

このような子どもの権利についても意識しながら、次のスライドから、神戸市の子どもの居場所の取組について、御紹介させていただきます。

神戸市では、親子で集える居場所、子どもだけで集える居場所など、様々な種類の子どもの居場所を設けております。お示ししているもののほかに、青少年を対象にした居場所としてはユースステーションなどもございますが、本日は主に小学生までを対象とした子どもの居場所を中心に御紹介いたします。

まず、神戸市民にとって一番身近な子どもの遊び場、居場所としては児童館がございます。

先ほど、久元市長からも御紹介ありましたけれども、市内には120館もの児童館

がありまして、政令市で2番目の多さとなっております。今後、児童館を神戸市の強みとして、地域の子育て支援の拠点として充実させていく予定です。

また、市内唯一の大型児童センターとして、こべっこランドを設置しております。令和5年2月にハーバーランドから兵庫区の和田岬に、移転リニューアルオープンをいたしました。このこべっこランドは、園庭の遊具でのびのび遊べる屋外スペースのほか、雨の日や暑い夏でも屋内で思い切り体を動かして遊べる施設になっております。オープンから9月末まで8か月で、延べ38万5,000人の方が利用をしていただいております。

続いて、こべっこあそびひろばです。先ほどのこべっこランドは市内中心部に設置されておりますけれども、こべっこランドから少し遠い市内の東部、北部、西部の3か所に中規模の施設として、こべっこあそびひろばを3か所整備しております。対象年齢は未就学児までで、こべっこランドと比べると、小さなお子さんが対象にはなりますが、こちらにも大型遊具がありまして、天候に関係なく体を思い切り動かして遊べる屋内施設となっております。

続いて、おやこふらっとひろばです。先ほどのあそびひろばよりは小さい規模で、主にゼロ歳から2歳の小さな乳幼児と保護者のための居場所として、市内9か所の各区役所内に整備をしております。乳幼児健診等で区役所を訪れた際などに気軽に立ち寄っていただけて、親子で思い思いに遊んで過ごすことができる屋内施設となっております。

続いて、子どもの居場所、子どもが自分で出かけることができる場所となっております。地域団体などが主体となって実施していただいております。いわゆる子ども食堂などの居場所で、市内に約300か所ございます。地域の子どもたちを広く受け入れて、主に小学生が利用していますが、主に食事の提供、学習支援を実施していただいております。中には自然体験などの活動も取り入れていただいている団体もございます。

次は、学童保育です。保護者が就労している小学生が対象にはなりますが、学童保

育についても、児童に適切な遊びや生活の場を提供する居場所になっておりまして、市内には隣接の学童保育も合わせると246か所で実施しています。

最後に、のびのびひろばです。市内108か所の小学校で、地域のボランティアの皆様のご協力の下、放課後に小学校の図書館や運動場などを活用して、子どもたちに安心して遊んだり過ごしたりできる場所を提供しております。

このように、神戸市内で子どもたちが年齢や体力などに応じて遊べる場、居場所として主だったものを紹介させていただきました。今回のフォーラムでの意見交換の一助になれば幸いです。

私からの説明は以上です。

○梶木座長     ありがとうございます。そうしましたら引き続きまして、子どもたちの体力低下について、現状報告を教育委員会の芝田次長から、お願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

○芝田次長     私のほうからは、先ほど市長からもありましたけれども、児童生徒の体力低下の現状と、体力向上に向けた取組について御説明をさせていただきます。

今日、見ていただく資料は、全国体力・運動能力、学習習慣等調査というものがございまして、そこから大きく3点、体力の合計点、そして外遊びの時間、それから画面を見るスクリーンタイムという、どれほどコンピューターであったりそういう画面を見ているかというようなものにつきまして、平成30年度から令和5年度まで取ってきておりますので、神戸市と全国の結果を対比して見ていただくというふうに考えてございます。

まず、それでは1つ目ですけれども、体力合計点というものでございます。今見ていただいております資料は、小学校5年生の左側が男子、右側が女子という分け方をさせてもらっておりまして、それぞれ薄い棒になっているものが全国、濃い色になっているものが神戸市の合計点ということになっております。

これを見ますと、全体的に神戸市の小学5年生の児童の体力合計点が、全国よりも

若干低いと。特に女子については、低いということが見てとれるかと思いますが、令和5年度男子のところは、初めて全国を少しですけども、上回ったというふうな結果がございます。あと、薄い折れ線グラフになっているのが、これは全国との比較でございまして、初めて5年生の男子が平均を超えたというふうなグラフになっているかと思えます。

次を御覧ください。次は同じ体力合計点ですけども、これは中学2年生の男子と女子というふうになってございます。

これはもう見て一目瞭然ですけども、男子女子ともに、全国平均を下回っているという結果になっておりますが、ただ、全国との差はここ数年は、縮まってきているというふうな捉え方もできるかというふうに感じてございます。

次の資料でございしますが、これは体育の授業以外で、体を動かす、遊び、運動、スポーツというものが1週間どれぐらいやっているかというふうな資料でございします。これは小学校5年生の結果ですけども、これは神戸市の小学校5年生の児童は、全国平均よりも多いとこういう結果が出ております。

平成30年から令和5年ですけども、年によっても大きく違いますし、それから男女においても、両方とも全国を上回っているというふうな結果が出てございますが、次の資料を見ていただきますと、同じ体育の授業以外で1週間当たりどれぐらい運動しているかと、これは部活動も含んだ結果の中学2年生の結果でございしますけれども、左側が男子ですけども、男子は昨年、一昨年と全国平均を上回ってございしますけれども、今年度、若干この運動時間が減ってきていると。ただ、女子になりますと、これはもうここずっと全国よりも運動時間が少ないという結果が出ております。

次の資料でございします。先ほど申しました、スクリーンタイムです。平日に学習以外で、テレビであったり、DVD、ゲーム機、あるいはスマホ等、見ているのが3時間以上あると答えた児童生徒の割合を、経年で見ていただいております。

小学校5年生は全国に比べますと、若干少ないというふうな数字が出ておりますけ

れども、それでも毎年上がってきているというふうな捉え方ができるかというふうに思います。次の資料は、同じく中学2年生です。中学2年生も全国に比べると、ややスクリーンタイムというものは、少ないというふうに見てとれますけれども、全国同様、年を重ねるごとに増加傾向にあるということが見てとれるかと思います。

こういった体力向上に向けて神戸市教育委員会としては、大きく3点の取組をしているところでございます。

まず1点目ですけれども、運動やスポーツの楽しさを実感できる、特に体育の授業として、このような実感をしていただくというような内容の改善をしております。

2点目は、運動意欲の喚起ということで、主体的に運動やスポーツに親しむことができる支援というものを行ってございます。

3点目は、運動の機会の創出ということで、これは民間事業者や大学生、そして地域の連携もありまして、体力を支える基盤の整備を行っている。できるだけ運動する機会を創出するという、この3点に取り組んできているところでございます。

その中で、2点目の運動意欲の喚起に関しましては、そこにありますように、学習用パソコンを活用したGIGAスクール構想byスポーツ、私たちはギガスポと呼んでおりますけれども、このような取組。

そして先ほどの運動機会の創出に関しましては、大学生の参加協力による、放課後運動遊びの推進事業を行っているところでございます。

この2点を、少し紹介させていただきます。

先ほどお伝えしましたギガスポに関してですけれども、これは今全国ですけれども、小中学生には学習用PCを配られておりますので、これを活用してございます。体力テストの結果が出ましたら、これを各自、自分のパソコンに入力をしていきます。そうしますと、自分の得手不得手というものがレーダーチャートで示されまして、そこから紐づけられた、例えばオリンピック選手とかそういう運動の長けた方のお手本動画というものが、各自見られるようになっております。そうすることで自分の得意を

さらに伸ばしていったり、あるいは苦手な種目について克服するということにつながっている。

さらには、今年度、コベルコ神戸スティーラーズの選手によりまして、体力向上につながる運動遊びの動画というものも提供していただきまして、楽しみながら運動を行っていく意欲付けになっているというふうに思っております。

もう1つの機能は、そこにあります右側でございますけれども、大変小さくて恐縮ですが、運動日記というものも活用しております。これは毎日、子どもたちが運動をどれぐらいしたか、どのような運動をしたのか、何時間ぐらいしたのかということ、毎日記録していくことで、1週間の運動時間、消費エネルギーというものが見える化されるというものでございます。これを各自入力することで、自分のポイントが見られたり、あるいは友達と交換して、自分は割と運動ポイントは高いなということであったり、さらには校内でランキングというものも見られまして、自分はもっと運動しなければいけないなであったり、結構自分はやれてるかなというような、ゲーム感覚で運動意欲の向上につながると、そして習慣化につなげていきたいというようなこともしております。現在、このようなギガスポに関しましては、まだ今モデル実施という形ですので、現在小学校11校で取り組んでいるところでございます。

次の資料でございますが、放課後運動遊び推進事業ということでございまして、放課後、運動場を開放しまして、そこに大学生のボランティアの方に来ていただいて、子どもたちと一緒に遊んでいただくというような取組をしております。

大学生は運動遊びサポーターと呼ばれまして、子どもたちと鬼ごっこであったり、その写真にありますように、縄跳びであったり、そのようなことを一緒にしてもらおうということに取り組んでいるところでございますが、やっぱり運動遊びサポーター、大学生の方が来てくださる日は、子どもたちが多く残って運動場で遊んで帰るというような傾向がもちろん見られますし、ただ、これも全部の全ての小学校というわけではございませんで、12月現在、31校の小学校で実施しているというようなところ

でございます。

このような取組をしていくことで、子どもたちの体力低下の現状を、何とか食い止めていきたいということ、そして体力向上に向けてこのようなことを取り組んでいるということでございます。

私からの説明は以上でございます。

○梶木座長 ありがとうございます。それではここで、先ほどの子どもの居場所と体力に関する、体力低下の現状についてお話しいただきましたけれども、これに関して御質問、御意見とかを募りたいと思いますが、委員の皆様いかがでしょうか。いかがですか。何か感想でもいいですし、質問でも、質問となると難しいかもしれませんが。

少し私から先に、ちょっと考えておいてくださいね。では、大学生のサポーターが、学校に入ってという話をお伺いして、いいなと思ったのですが。この大学生たちは研修とかは受けているのですか。私も大学で教員やっているものですから、研修なしにこういう子どもの遊びに参加させるというのも、すごく不安でしかないのですけれども、いかがでしょうか。

○芝田次長 この運動遊び推進事業に関してのみの研修というものは、特に行っていないのですけれども。

ここに参加して下さっている大学生は、多くが普段から学校のスクールサポーターとして、普段は子どもたちの学習の補助であったり、そんなものをしてきて下さってる方がほとんどですので、それに関しては、大学であるいは我々の方から一定のレクチャー等もさせていただいておりますので、子どもとの関わりについては、今のところ、子どもは問題がないのかなというふうには思っております。

○梶木座長 ありがとうございます。いかがでしょうか。今の御意見を聞いて、御回答も含めて。澤井さん、何かありますか。

○澤井氏 私は子どもが4人いまして、上の子が小学生のときは、放課後は学校に

残ってはいけないと言われていて、授業が終わったら必ずすぐ帰りましょうというシステムで、運動場では遊べない状態だったのです。今、この放課後運動遊び推進というのでできていると聞いて、すごいうれしいなと思いました。

何でもいいのですか。

○梶木座長 何でもいいですよ。自由にと市長もおっしゃっていました。

○澤井氏 梶木先生のさっきの質問なのですが、私は逆に何か研修を受けなくてもいいなと思って、何かありのままの大学生を見せてほしいなと。でも多分大学の先生として、大学生を小学校に送り出す立場だと、不安になる気持ちはすごくあって、何かそこがジレンマだなと思いました。

何か地域、難しいのですかね。我が母校に、卒業した大学生とかが遊びに来てくれるぐらい、何か身近なものになればなと思いました。

○梶木座長 ありがとうございます。

いかがでしょうか。

○豊永氏 この学習用パソコンの活用というところなのですが、実は猛反対です。

画面、これあるとより離れられないのかなというのを、常に感じております。その上で、なおかつ、ここでのジャッジされる部分、できるできないということ、やはりそのデータとして押し付けられる。

すごく得意な子はいいと思うんです。そうでもない、例えば得意じゃない子に対して、やっぱりどう伸ばしてあげるのかというのが、比べるところでは測れない何かがあるのかなと思っているので、やっぱり画面でデータ化するのではなくて、自分自身が納得できるとか、何か肌で感じて楽しいとか、そういう部分で何かできたらなというのを感じました。

○久元市長 ちょっといいですか。

今に関連して、やっぱり別に私は反対とかないのですが、率直に学校現場の先生方から、こんな入力する暇があったら、体動かしたほうがいやというような意見と

かないのですか。

○芝田次長　今の市長がおっしゃった意見が、直接私どもに届いているわけじゃないのですけれども。

この入力に関して、すごく時間がかかるというわけではなくて、メモをするぐらいのことだというふうに思っておりますし、それから毎日、日記というものも、学校来て、みんな子どもたちあけるのですけれども、その中のパッパッとこう入れるだけで、そのような時間があるかないかというのを言われますと、ないんじゃないかなというふうに私は思って。

○久元市長　パッパッと。

○芝田次長　パッパッと入れる。

○久元市長　分かりました。

○芝田次長　今の豊永さんがおっしゃった、確かに苦手な子どもからすると、何か苦手なものをまた押し付けられるのかというふうに、感じる部分も確かにあるのかなというふうに思っております。

ただ、その中で、これも捉え方の違いかと思えますけれども、こうやればうまくいくよというふうなものも見られるということであれば、そうなのかというふうに見る子どももいるのかなというふうに、私も思っております。誰もこれは強制しているわけではなくて、入れると見ることができますよということですので、これも活用しながら、でも今おっしゃっていただいたことも参考にさせていただきたいなというふうに思います。

○梶木座長　私からもう1ついいですか。

放課後運動遊び推進事業、学校の校庭でやられているところがあるというのは、いい話かなと思いますけど。

地域で遊べないからなかなか学校の運動場というようなところもあるのかなと思うのです。やっぱり子どもたちって地域で育つってすごく大事なのですけれども。学校と

か、言ったら学童とかで子どもたちを囲い込みすぎているようなところもあったり、児童館とかいろんところで先ほどのお話で、子育て広場とかふらっとひろばとかいろいろあるんですけど、そこですごく囲い込んでいて、公園には子どもが遊びに出ていないとかというような、公園は子ども遊んでへんからもう要らんのちゃうかみたいな、そういう極端な意見も出てたりするんですけど、そのあたりはどういうふうにお考えですかと。こっちに聞いていいですか、質問なんですけどね。選択肢がいっぱいあるのはいいとは思いますが。

○芝田次長 澤井さんに大変申し訳ないなという思いで、学校が残れないよというふうな時代があって、確かにそういうときもありました。今は多くの学校は、放課後残って遊んでいいよ、その中で大学生が入ってきている学校、曜日があるというふうな形になっているかと思うのですけれども。

私が思いますのは、子どもたちが帰るときに、一旦帰ってからカバン置いて遊びに行くよりも、帰りしなにカバンを置いて、そのまま運動場で遊ぶ。そして、子どもたちと周りで遊んだ後、じゃあバイバイというふうに帰るのが、1つの流れになるのかなというふうに思っております。昨今、子どもたちも帰ってからも忙しい子どもたちもたくさんおまして、習い事であったりというふうなものもありますので、1つ、たとえ10分であっても、帰りしなに運動場で遊んで帰るというのは、私は1ついい取組ではないのかなというふうには思いますけれども。今、梶木先生がおっしゃったように、それで公園で皆が集まってくるという機会を失っているのかなというのも、確かにそれもあつのかなというふうに思った次第です。

○久元市長 ちょっとだけ質問。基本的な質問なんですけど。

今学校では、子どもはちゃんと学校で、放課後運動場で遊んでもらったりしても、学校から出たら、必ず家に帰らんといかんわけです。どっかで、公園で遊んで帰ったらあかんわけです。

○芝田次長 基本は子どもたちは、まっすぐ家に帰ると。当然、保護者も心配され

るということもあって、カバンを置いてから遊びに行きましょうという指導は、学校でしていると思っております。

○久元市長 分かりました。

○梶木座長 よろしいでしょうか。

丸山さん何かありますか。

○丸山副局長 先ほど御紹介させていただいたいろんな居場所、囲い込んでいるんじゃないかと梶木先生に言っていたいたのですけれども、やっぱり屋内の施設が多くございますので、その中で遊んでいただくのが基本にはしているのですけれども。やはり小学生ぐらいになると、先ほど紹介あったように、運動場で発散させて遊びたいという子たちもいますし、ただ親御さんの思いとしては、共働きの世帯が先ほどのデータでもありましたけど増えていますので、学童に行って宿題を早く済ませて、遊んでほしいというような願いもあるでしょうし、子どもたちの意見をどれぐらい吸い上げて、そういう安全な環境を、放課後の時間を作ってあげるかということが大事なんだなど、皆さんの話を聞いて思いました、囲い込んでいるわけじゃないんですけど。

○梶木座長 ちょっと言い方を間違えたかもしれません。ありがとうございます。

ほかいかがでしょう。今のを聞かれて、お二人。

画面の向こうで、山下さんですね。

山下さん、何かございますか。

○山下氏 ありがとうございます。すごい皆様の御意見に、すごく勉強になります。ありがとうございます。

先ほどの御意見で、大学生の方にレクが必要かというところが、非常に私も思うところありまして、また私達も動物なので、動物として本能的なところを信じたいというのが、私の本音ですけれども。

私、皆様と若干違って、公共空間の場所側に関わっている人間で、そこで感じたことを申し上げれば、パブリックスペースに関わる方々が、向き不向きがあるかどうか

というのを、以前考えたことがあるのですけれども。今すごく大きい企業さんでも、広場的空間、建物の中に公園のような場所を造る、敷地内に造るところが非常に多いのですが、そこに関わる方々を見ておりますと、この人が出向とか御異動で、広場とか公園の担当になられたけど大丈夫かなと正直思っていたような方が、1年ぐらい経つと、非常にやっぱり堪能されて、楽しく仕事をされているようなケースが多くて、私なりの今の感じていることは、やっぱりパブリックスペース、オープンエア、屋外の公共空間に関わって、会社とかとは違って多様な人々が往来するところに関わると、人は人間らしくなるんだというか、やっぱりいろんな生身の人間に関わることで、いろいろな失いかけていたところを取り戻せたりするような、大げさに言うとそんなことも感じておりますので。何かやっぱり自分の環境だけでは関われないような人と、大学生の方も、子どもたちの斜めの関係という言葉があるのですけれども、何かそういうことの機会が、しっかり制度としてつくられているというところに非常に感動いたしました。

ありがとうございます。

○梶木座長　ありがとうございます。研修の話、私は実は言いたかったことは、何か遊ばせ屋さんになってしまう大学生とかが、割と何かしてあげなくちゃみたい、サービス提供型になってしまうことが割とあるので、そうじゃなくて、子どもが遊びだす力を待つということをしてあげているというような、そういうその遊び観だったり、子ども観を自分の中で引き出した上で、そういう場に関わることがすごく大事だろうなと思っていますので。何かサービスをしてあげなくっちゃとサービス精神、すごく学校とかに関わる人って旺盛なので、そういう意味でちょっと研修ということ、研修と言わないのかもしれないのですけれども思っておりました。

ありがとうございます。

○山下氏　ありがとうございます。よく分かりました。

○梶木座長　ありがとうございます。では、ちょっと次に移りましょうか。

皆さん、今日は自分たちの活動を紹介したいということで、しっかりと用意してきていただいていますので、こども家庭局と教育委員会では、もういっぱい報告していただきましたので、我々もさせていただきたいと思います。

僭越ながら、私が最初に発表させていただきたいと思うのですが、ちょっと資料、やってきたことが、人生が長くなるとたくさんになりまして、多くなってまいりまして、資料は多いんですけれども、写真を多くしてまいりましたので、さささっといかせていただきたいと思います。では、パワーポイント、そちらで動かしていただけるのでしょうか。

私は神戸女子大学で教員をしておりますけれども、IPAという子どもの遊ぶ権利のための国際協会というところの、今は代表しております、それと日本冒険遊び場づくり協会というところの理事もしております。そういう関係で、いろんな子どもの遊びに関わることには、研究を含めて実践でやっております。

まず、最初のページをお願いします。子どもたちの外遊びとかの環境について、調査をさせていただいているのですが、これは須磨区の小学校で2006年と2015年にした結果なんですけれども、子どもたちに外で遊べてない理由を聞いたところ、割と3つの間といわれまして、空間とか仲間とか時間というふうに大人は言って、大人たちは遊ぶ空間がないからだよなというふうにすぐに答えますけれども。子どもたちに聞くと、何ととっても時間ですね。遊ぶ時間がないからと。塾や習い事があるからということで、先ほど次長がおっしゃったように、10分でも遊んでいったらいいじゃないかということなのなんですけれども。

子どもにとって隙間時間というのは、じっくり遊べないです。隙間空間では遊べるんですけれども、やっぱり遊ぶためには、しっかりした時間をとるということで、学校で拘束しすぎてるんじゃないかと思ったりもするんですけれども。日本の学校は子どもたちを学校に置きすぎてるんじゃないかというようなことも考えております。子どもたちの意見としては、外で遊べないのは、そういう時間がないからというふうに思

っています。

次のスライドですけれども、どこで子どもがよく遊んでいるのかということで、10年間隔ぐらいで調査していますけれども、この10年、ちょっとデータもう古くなりますけれども、自分の家と公園ですね、近所の公園というのが2大トップになってきています。特に、友達の家にも行かなくなってきました。これは共働きのおうちが増えてきているとか、親同士が知り合いじゃないおうちには行かせないようにしているとか、そういう親御さんの意見があったり、そのおうちにどんな人がいるかわからないので怖くて遊びに行かせられないというようなことです。それから、いろんなところで遊んでいたのが、やはり公園ということになってきているというデータになります。

次、じゃあ公園は自由に遊べるのかということで、これも神戸市内の公園の中で、禁止等看板がどれだけあるのかというのを、調査した結果にはなりますけれども。ボール遊びができないとよく言われますけれども、意外とボール遊びの中でもバットを使ったとか、ゴルフだったりとか、硬いボールというのが禁止されていることが、看板には書かれていますので、柔らかいボールであれば、本当はできるのじゃないかなというところですけど。このような禁止の看板が上がってしまった時点で、何もできないと、こういうふうに子どもたちが思ってしまったケースもあります。

それから遊具ですけれども、老朽化が進んでいるということで、これは全国的な傾向にはなりますけれども、遊具がどんどん撤去されていくということで、20年以上経過した遊具が撤去されて、子どもが遊んでないからということで、健康器具に変わっていくとか、何もないというようなことになっています。

その次のスライドです。先ほど体力のことがありましたけれども、私は子どもの姿勢に非常に危惧しております。

これ子どもの姿勢の調査をさせていただいたときの、姿勢の調査をしているときの姿勢です。自分たちの姿勢のことについて回答してもらっているのですが、いろ

んな姿勢で子どもたちが回答しているなどというので、これ特殊な事例ではなくて、本当に一瞬、ピッとやった時間、10秒ぐらいはピーてするんですけども、すぐにぐにゃぐにゃぐにゃと。大人もそうなのですけどね。

非常に机と椅子が合ってるかどうかというのも、学校の先生もあんまり関心がなかったりして、合わない机と椅子で座っているとかというケースもあります。こういう机と椅子だけではなくて、先生方に聞くと、やはり子どもたちの体幹が育っていないと。体幹ってすごく大事だと思うのですね。人生100年の時代になって、姿勢だったりとか足腰がしっかりしているということは、本当に大事なことだと思いますので、子どもたちにこういうきちんとした、しっかりと育った体幹を育てていくということは、きっと人生のギフトだと思います。そういうことは、運動でもできるのですけれども、やっぱり遊びの中で、全身を使ってということ育てていくんだらうと思います。

ちょっと余談になりますけれども、子どもの体幹が育たないのは何ですかねと先生方に聞くと、やはりいつまでもベビーカーに乗っていたり、最近では電動自転車にいつまでも乗っていたりというので、子どもが歩かないような環境というので、共働きが増えてきているということだとすると、子どもを運ぶ対象になって、物のように運んでしまっているということが言われていて、なるほどなど。そういう目でまちなかを見ると、大きな子どもがベビーカーに乗っていますね。仕方ない面もあるとは思いますが。

それで、冒険遊び場のことについて、少し御説明したいと思います。冒険遊び場というのは、全ての子どもが自由に遊ぶことを保障する場所で、子どもは遊ぶことで自ら育つという認識の下、子どもと地域と共につくり続けていく、屋外の遊び場であるというふうに定義しております。

どんな遊びがされているかという、次のスライドをお願いします。普通の公園ではなかなかできないような、穴を掘ったり、水を使ったりというような遊びですね。自

然、五感を生かした遊びをするということ。こういう遊びが可能になるというのが、プレーリーダーという、子どもの遊びを見守る、一緒に遊ぶとかというよりも、子どもの主体性を育むという遊び場を提供しているということです。

遊具に関しても、手づくりの遊具が写っていますけれども、見た感じちょっと危険かなというふうに思われる方もいると思いますけれども、遊びの中でのリスクとハザードをしっかりとリーダーが区別していますので、ここは子どもが挑戦するところというものは残しています。ただし、落ちている釘などはしっかりと省いていくというようなことをしています。

そういう子どもの遊び場も冒険遊び場もすごくいいのですけれども、一方でその遊び場にリーチできる子どもというのは限定されていますので、私の今の課題としては、より多くの子どものように主体的な遊びを届けるということが、重要なのではないかと、次をお願いします。次の次です。

移動型ということに関心を持っております。拠点型というのは、子どもがそこに遊びに行って、そこでプレーリーダーが待っているのですけれども、次の移動型になりますと、プレーカーにプレーリーダーが乗って、各地の校庭だったり、公園だったり、イベントだったりというところに遊びを積んでいきます。

このプレーカーに関しては、実はドイツがすごく先進的な事例としてあります。ドイツに私も2年間ほど行って、この遊び場を見てきたのですけれども。どこでということ。出張場所、本当に公園でしたり、まちなか、それから学校の敷地内ということ。まちなかは特に官公庁など、施策をつくる場所なんかの前で、あえて遊び場をするということ。役所の人たちにこういう遊びが大事だよということを見てもらうというようなことを、戦略的に行っていたり。

それから、何を使ってということ。プレーカーも様々なものがあります。トレーラーで運んでいくものとか、黒板付きのトレーラーだったり、電気自動車だったり、それからほかにはもう自転車だったり、キャリーケースだったりということもあ

りました。

遊びの多様性ということで言うと、専門職が大好きなドイツの国民性もありますので、いろんな遊びがあるんですけども、サーカスだったり、アートだったり、テーブルゲームだったり、非常に人気のある脱出ゲームを外でやるとかいろいろな遊び場がありました。

スプレーアートなんかも、木と木の間にラップを回して、普通の壁にすると何かだめだと言われることがあるので、体験としてそういうところでやっていたりしました。

日本では、次をお願いします。プレーカーというのは、もう日本でもやっているんですけども、この写真にあるのは、自然災害のときの被災地に子どもたちに届けるというプレーカーの事例になります。これ、先ほど私が理事をしていると言いました、日本冒険遊び場づくり協会が、東北に支援で回ったとき、あるいは熊本に支援で回ったときに寄付をいただいて作ったプレーカーです。

プレーカーの次の様子をちょっと見たいのですけれども、日本の場合は多くは軽自動車なんですけど、その中に遊び道具をたくさん積んでいて、道具と素材をいっぱい積んでいきます。その中から外に出すと、車の中も遊び場になるというようなことになっています。全国でどれぐらいのプレーカーがあるかというところはまだ少ないわけですが、ドイツの事例なんかを、全国で報告することによって増えてきました。

実際には、次の写真をスライドをお願いします。こんな感じに全国でプレーカーを使った活動が今、増えてきています。例えば、中段の右から2列目の黄色いプレーカーありますね。これは瀬戸内市さんですけれども、瀬戸内市が直営でプレーカーをやっているという事例だったり、ほかは結構NPOさんなんかをやっているのですけれども。左の列の一番下、企業さんでJINSさんという眼鏡のフレーム会社さんなので、寄付でプレーカーをされてます。眼鏡のフレームって、目が悪くなるのが、フレームが売れる1つなのですけれども、そうではなくてやっぱり子どもは目が大事ということで、プレーカーを寄付されていたりします。

ドイツとの交流のことを、少しお話したいと思えますけれども。文部科学省とドイツの家庭高齢者女性青少年省というところが、その事業をやっている、それぞれNPOに下ろして委託事業としてしております。

今年、先月なのですけれども、ドイツから専門家を7名お招きしまして、神戸市で滞在していただきました。その際には、小原副市長とか中山こども家庭局長、丸山こども家庭局副局長も表敬訪問に行かせていただいて、非常にいいお話を聞かせていただいたということで、ドイツの方々も喜んでおられました。

その後、北須磨小学校とか、学童保育、児童館というところで、須磨でいろいろ交流していただいたり、11日には、神戸市灘区の復興の過程で作られた、風の郷公園というところで、どういう思いでこういう公園ができて、この公園は禁止事項の看板がないのですよ、なぜそういうのがないのかというような御説明をいただき、子どもたちが危機的状況に陥る自然災害の中での、子どもの遊びの大切さだったり、地域で子どもを育てることの大切さというのをお話いただきました。

その後、かぜのさとプレーパークという、今年5月からスタートしているプレーパークで、子どもたちと一緒に遊ぶということだったり、リースづくりをドイツの方と一緒に楽しみました。

その午後には、今日ちょっと緊急でお休みされているということですが、六甲道児童館屋外遊び場がないという児童館ですけれども、そこで伝承遊び、コマの何か全国の名人が来られているというところに行きまして、ドイツの方と日本の方でコマという伝承遊びを通して、多世代で交流していただく時間が取られました。

11月12日には、近くのKITOで国際フォーラムをしまして、プレーカーが生み出す子どもの居場所ということで、150名も集まっていただけのフォーラムを開催することができまして、神戸市の全面的な御後援いただきまして、本当にありがとうございました。

こういうことやっているのですけれども、それ以外に現場づくりということで、実

は私研究者なんで、あんまり現場で遊ぶということはやっていなかったんですが、コロナ禍でやっぱり子どもが遊べていないということを感じて、うちの子は1週間靴を履いていませんという、衝撃のコロナの最初の頃ですね、そんなに外に出なくても子どもが大丈夫な世の中になっているんだということで、ちょっと遊び場づくりを学生とともにやっていくことにしました。

次、お願いします。プレーワゴンということで、ワゴンを使った移動型遊び場という実践です。

次、お願いします。こういうキャリーケースに遊び道具を積んで行って、これは東遊園地が新しくなる前にやった事例ですけれども。

次、お願いします。学生たちがキャリーにいろいろ積んで、自分たちで手作りしたダンボール遊具で、遊び場を作っていました。何も無いところに遊び場を展開するという事です。

次、お願いします。そういう何も無いところにポップアップでできるというのは、すごくいいなと思ひまして。というのは、遊具というのは点検も必要ですし、非常にお金もかかるのですけれども、そういうこれからの少子高齢化を考えると、それよりもやっぱりもっと子どもが自主的にということ、簡単な遊具で遊べるということ、遊び道具で遊べるということを経験してもらいたいということで、あえて大きな遊具の無いところを選んで行っています。

例えば、次のスライドで、ロープ1本あれば大縄もできますし、綱引きもできますし、電車ごっこもできるしというような、ロープ1本でどれだけ遊べるのだというようなことが、すごく重要になってきます。大人は遊具、遊具と言ひますけれども、じゃあロープで遊べるのかということだったり、ボール転がしなんかいうのは、いろいろなコースが作れますので、こういう道具だったりとか、ベーゴマだったりとかいうのを、伝承的な遊びだったり、輪投げとかモルックなんていうのは、非常に簡単な遊びですけれども、ちょっと計算も入っていて、モルック人気があるのでそういう遊びな

んかも展開しています。

次のスライドです。これは今年、森林植物園でさせていただきましたけれども、丸太を御用意いただいて、丸太で遊ぶということで、グラグラする丸太で遊んでいくと非常に子どもたち慎重になるのですけれども、こういうの危ないかと言われると、そのうち慣れてきますので、それをしっかりと大学生たちが危なくないように、見守っています。ギリギリの線までは助けないというようなことを、事前に指導をしまして、やっています。

このときは、のこぎり体験なんかもさせていただいて、危ないのじゃないかのこぎりと言われますけど、使わないといつまでも子どもたち使えないままです。森林植物園さんの多大なる御協力の下、こういうことが実現しました。

その根底にある考え方としては、最初にも御説明ありましたが、やはり次のスライドお願いします、子どもの権利条約の中の第31条に、遊ぶ権利というのが明記されています。その遊ぶ権利というのはすごく大事なのですけれども、なかなか忘れられていますので、これは忘れられた条文というふうに言われています。

今年、次、大会がIPAの国際大会のグラスゴーでありまして、その場で日本の現状を説明してきたところ、国連子どもの権利委員会のジュネーブの方も聞いていただいて、日本の状況を今後どうなっていくのでしょうと、非常に関心を示していただきました。

ラストのスライドになります。冒険遊び場が、一番最初に始まったデンマークにあった退屈ベンチというやつです。子どもには退屈がすごく大事ということで、退屈と言った子どもたちに、退屈はいいことだよ、ここで退屈を楽しんでいろいろ考えてごらんというようなベンチが置かれていました。日本に子どもたちに退屈を許す風土、風土というか社会的な状況がない中で、こういうことが言われているってすごく大事ななと思いました。

ちょっと長くなりました。以上です。

では、私長くなったのですけども。

次、続きまして、カミカ茶寮+読林さんですね。豊永様、お願いします。ごめんなさい間違えました。順番、すまっこからですね。森のようちえんすまっこの代表理事をされています、澤井さんからの順番でお願いしたいと思います。

○澤井氏 御紹介にあずかりました、一般社団法人森のようちえんすまっこのもりの代表理事の澤井です。

資料の詳細に書かれていない部分の自己紹介を、ちょっとさせていただきます。

私は高校卒業後、就職しました。その後、保育の道に進むために退職し、専門学校に通いました。私立の保育園、幼稚園で勤務し、子育て中に森のようちえんに出会いました。2014年5月に、有志と森のようちえんすまっこのもりを立ち上げました。4人の子どもの母をしています。学生時代、あまり勉強してこなかったもので、すごく語彙力がなく、自分の思いを伝えるのが苦手です。今日は澤井さん頑張ってるなと見守って聞いていただけたら、ありがたいです。

それでは、すまっこのもりの活動を紹介させていただきます。

親子クラスはゼロ歳から就学前までのこどもと保護者を対象に、毎週水曜日に開催しています。春休み、夏休みには、年3回、小学生も対象にした特別企画を須磨区の天井川上流で開催しています。

須磨区の手町に土地を借りて、畑をしています。この土地は、神戸市さんの空き地地域利用事業の補助金をいただいて整備していただきました。食育を兼ねて収穫して、その場で食べられるものを植えています。

次、これはソーラークッカーといって、太陽の光で調理するソーラークッカーです。玉ねぎとか収穫したときに、子どもたちに包丁で切ってもらって、それをこの筒の中に入れて、1時間ぐらいうれば、蒸し野菜が出来上がってるという優れものです。

雨水を溜めて畑の水やりには、できるだけ雨水を使って、資源の大切さを伝えています。

第二水曜日には、須磨区の飛松中学校の敷地にある、とびまつの森で活動させていただいて、野外炊飯をしています。この日はへびパンを作りました。とびまつの森には川もあり、夏は川遊びをします。

普段は、須磨区のいたやどの森へ行って、お昼にはテーマトークをして、育児の悩みなどを共感しています。親子クラスでは、まず大人が楽しむことを狙いとしています。保護者の中には、自分の子どもの頃にしていた遊びを思い出して、懐かしく思う方もいらっしゃいます。自然遊びをしたことがない保護者の方も、童心に返って楽しんでいきます。そんな大人の姿を見て、子どもたちも自然と楽しんでいきます。

最初は抱っこで山に登っていた子どもたちも、半年参加すると、体幹が養われ、散策しながら、自分の足で登るようになります。光や影、植物ややしなど、複雑な刺激のある野外活動で、意図しないものに出会い、心動く体験を子どもたちと一緒に楽しむ。そして、核家族化の昨今、皆で子育てができる場になればいいなと思って、親子クラスは活動しています。

次は、預かり保育です。預かり保育は、2歳児から5歳児までを対象に、月曜日から金曜日の9時から14時まで、普通の幼稚園と同じように、子どもたちを預かっています。こちらも神戸市さんの多様な集団活動事業の認可を受けて活動しています。

すまっこの森は、園舎のない小さな手づくり幼稚園です。この写真は4月にいたやどの森で野いちごを取っているところです。

5月は畑の竹やぶでタケノコを採ります。

6月には梅シロップを作ります。熱中症対策に飲んだり、3月のお店屋さんごっこでは、保護者に振る舞っています。

5月から10月には、須磨海岸で水遊びをします。こちらは須磨区の天井川の上流で、川遊びもします。

これは奥須磨公園で、ヤマモモを拾っているところです。あたり一面、ヤマモモ絨毯です。

冬になると、暖を取るために焚き火をします。1日外で遊んでいるものなので、ちよっと体が冷えるので焚き火をします。炭を使わずに、落ちている枯れ枝を使います。焚き火台で焚き火をするのですが、焚き火台に入らないものは、子どもたちがのこぎりで切って、いい大きさにして、焚き火台に入れます。こんな感じで、子どもたちも火の番をします。

小雨のときは、基本はレインコートを着て遊んでいます。大雨のときは、奥須磨公園などの東屋を利用して、製作などを行っています。

目的地までは、各自、大きなリュックを背負って行きます。

身近に虫や魚がいるので、虫や魚を捕まえる子もいます。これは魚を捕っています。

おもちゃや遊具がないので、自然物でよく見立て遊びをしています。これは木の枝で魚釣りごっこをしています。

こちらは草や木の枝でおままごとをしています。枯れた草を集めて鳥の巣に、これは見立てています。木が家やベッドになり、ここは家族ごっこをしているところです。

斜面すべりは大人気で、斜面があれば登って滑るを、よく繰り返しています。

畑の竹やぶの中は、子どもたちが通りやすいように、のこぎりで切って道を造っています。自分たちでこれ邪魔だからと切るときもあります。

木登りも大好きでよく登ります。

石垣を見つけると、ロッククライミングをしています。

森のようちえんイコール森林を指しているわけではありません。子どもたちが様々な形で、自然と触れ合えることができる環境であれば、それを活動場所とすることに問題はないと思っています。例えば、公園や園庭でも、その地域で生活している子どもたちですから、そこでの生活を自分のものとして楽しむことができることが、一番だと考えています。

自然から多くのことを学び、心の根っことなる感性や生きる力を育てています。それは自然の心地よいところからだけではなく、厳しいストレスもしっかりと感じるこ

とから、心も体もバランスよく育まれます。千変万化する自然と遊ぶことで、無限の興味を引き出すとともに、自然に対する愛情を育みます。これがすまっこのもりの活動です。

以上です。

○梶木座長　　ありがとうございました。素晴らしいですね。本当に楽しそうな、風景と空気が伝わってくるようでした。ありがとうございました。

では続きまして、カミカ茶寮+読林の豊永様、よろしくお願いいたします。

○豊永氏　　豊永祐子と申します。すばらしい、楽しそうな活動報告があった後に、私は灘区の一王山町でお寺の境内なのですけれども、カミカ茶寮という茶屋をしています。

ここの場所なのですけれども、とても市街地から近いところなのですけれども、こんもりとした自然が残っているところです。森も十善寺の裏山になるのですけれども、小さな八十八か所があって、そこが森になっています。

こういう活動というか、何か始めようと思ったきっかけなのですが、今から3年前の秋、摩耶山の天上寺で渡り蝶のアサギマダラに出会いました。ちっちゃい、アサギマダラ、体なのですが。1, 500キロも飛ぶというすごい力を持った蝶々に、私感動してしまって、一王山にも、アサギマダラを呼びたいと思ったのです。

2021年の春に、一王山の登山会という、毎日登山の文化があるのですけれども、その登山会の方や、地域の方、子どもたちと一緒に、アサギマダラを呼ぶ活動を始めました。

お寺の土地を貸してもらって、花壇から土づくりから、全て皆で協力して手作業で活動しました。花壇の枠なのですけれども、十善寺さんのお寺に竹があるんです。その竹をいただいて、その竹を割って、91歳の長老の方に、シュロで編んで枠を作るという、今日も実は28日で門松作りをしています、それと同じ要領で枠を作るという手法を教えていただきながらしました。土づくりは、土や葉っぱを、子どもたち

も一輪車やバケツに入れて、リレーをしながら花壇に入れるのです。発酵させて、腐葉土もたくさん作りました。

自分たちで作った花壇、フジバカマの種を植えたら、秋に満開の花が咲きました。9月には、その待ちに待っていたアサギマダラが飛んでくるのですね。もう皆で活動したので、うれしくてうれしくて、ぴょんぴょん跳びながら、おじいちゃんも、おばあちゃんも、子どもたちも、手を取り合って喜ぶのです。

それから、毎年もうフジバカマを育てる。そういうフジバカマの活動を行っています。

ちょっとだけ写真を用意したのがあるのですけれども、下の段の写真で、子どもたちが楽しそうに、森で遊んでいる写真なんですけれども。これは現役のモデルさんに来てもらって、自然な材料で作る、世界に1つの王冠づくりをしました。この王冠を被って、森の中を探検しながら歩く姿は、子どもたちは本物のモデルになったみたいで喜んで、森の中で遊びました。

それから上の段に、先日12月10日に銅鐸まつりをしました。行政と民間との初コラボということで、登山プレープロジェクトの一環で、道を整備したのですけれども。子どもたちは何をしたかという、子どもの発表の場を設けるために、銅鐸の原寸大の銅鐸を紙粘土で作りました。そのために、大小14個の桜ヶ丘銅鐸を原寸大で作るってどうしたらいいのだろうかと考えながら、その一升瓶を土台にして、紙粘土をものすごくたくさん使いながら、大小様々な14個の銅鐸を作るんですけれども、外でやります、寒いんです、何日もかけて作りました。

子どもたちは、多分ものづくりが大好きなのです。目を輝かせながら、作って考えるのです。銅鐸って何やろ、何でできてるんやろ本物は。何に使ってたんやろ。弥生人って、どんな人なんやろ。手を動かしながら、いろいろ考えて作りました。

楽器に使ってたんちゃうかという子どもは、それをどんなふうに使っていたのかというのを、お寺の境内で実演してくれます。境内を見渡せるのですけれども、こんな

に広くはないですかね、見渡せるのですけれども。そこで、こうやって使ってたんや、歌ったり踊ったりしながら、そのお祭り気分で実演してくれました。

走り回ります。でも寒いんです。寒いと体は自然に動き出すのですね。境内で寒かったら、鬼ごっこも始まりました。すごく自由なのです。ものづくりも遊びも、自由で楽しいから、するのだと思っています。でも楽しくないと、しないのですよ。外は寒いから、多分体動かして温まろうとするのですよね。大人が何も言わなくても、きっと自然にそうしてるんやなと思って、毎日見えています。

クリスマス最後、この一番下のところの写真なのですけれども。これは集合写真ですけれども、クリスマスが近くなったときに、小学校4年生の子どもが、お願いがあるんやと、私に申し入れてきました、ここでクリスマス会がしたい。何でと聞きました。いっぱい遊べるし、何かこの環境の中でクリスマスをしたらすごい楽しいんちゃうかと、子ども企画ですごく発信してきました。

そうしたら、大人が乗ってくるのです。おじいちゃんが子どもたちに、サククスを吹いてやろうとか、歌を歌おうとか。子どもたちもすごく楽しんで、もう入り混じって、クリスマスを楽しむのですけれども、子ども企画をした会に、大人まで今回楽しませていただきました。

一王山、普段はとっても静かなところなんです。でも子どもたち、ふらっと遊びにきます。時々ランドセルを背負ったまま来ます。ここでもう待ち合わせをする子もいます、待っても来ないときもあります。それでも、ふらっと来るのですね。

中学生の子で、小学生の時に来ていた子なのですけれども、時々しょんぼりしてくるのです。どないしたんと聞いたら、悩みがあるんやと言うのです。時々、いろんな悩みを聞きます。恋の悩みもあれば、友達の悩みもあったり、いろいろあるのですけれども、やっぱり来たことがあるところに、またふらっと来れる、すごくいい環境だなと思っています。

カミカ茶寮の前なのですけれども、一王山登山会の署名所になっています。その記

帳台というのも、やっぱり子どもの遊び台にもなるし、お寺の境内では鬼ごっこをする姿が、本当に見渡せる環境です。裏には森があります。秘密基地を作って、ちょっと隠れる子もいます。私、ここに来る理由はいろいろあると思うのですが、何か1つ挙げるとしたら、きっとこの自然がある環境が、みんなが大好きじゃないのかなと、そう思っています。

以上です。

○梶木座長　ありがとうございます。クリスマス会、行きたかったなという気がしました。

すごく子どもだけじゃなくって、いろんな世代の皆がやりたいことができる場になっているのだなというので、みんながみんなを認め合っていると、そういう感じがすごく伝わってきました。ふらっと行ったときに、いつも同じ人がいるというのもすごくいいのですね。行ったら誰かいるだろうと、知っている人が。その環境がきっとそのすごく行きたいとなるのかなと思いながら、聞かせていただきました。ありがとうございます。

そしたら、最後になりますけれども、全国まちなか広場研究会の理事であります、山下様からお願いしたいと思います。山下様よろしく申し上げます。

○山下氏　よろしくお願いいたします。

皆さんのされていることをお聞きして、すごく感動して聞いておりました。ありがとうございます。

私の自己紹介をさせていただきます。

今、街の真ん中に元々は商業施設なんかを作るような本当の一等地に、子どもの居場所、人の居場所をつくるような事業が、全国各地で増えておりまして、神戸市でいうとサンキタ広場とか、三宮プラッツとか、ああいった街の真ん中に人の居場所をつくるという活動、今は全国で増えているのですけれども。

広場という言葉を検索しますと、まだまだ交通広場と言われるバスターミナルやタ

クシープールのようなものがたくさん出てくる状況なので、広場という言葉で、私たちが見たい、人が活発に気持ちよさそうにしているような景色をつくっている広場をまとめたページを、全国まちなか広場研究会というホームページを作ってまとめるような活動をしているものです。

元々は富山市にあります、2007年に開業いたしましたグランドプラザという広場のスタッフをしていたものです。特徴は、広場は古代からあるわけですがけれども、人がいたくなるような、誰かに会えるような、そういった状態づくりを専属スタッフを雇用して、富山市役所が運用しております、その最初のスタッフのメンバーの1人でした。

この広場ができたときに、なかなか人がいたくなるような状態って、そんなに簡単に生まれるわけではないので、こういった状態づくりをみんなでつくろうということで、グランドプラザで楽しく遊ぼう、自分たちの暮らしを豊かにしようという方々が集まって、今はNPOになっておりますけれども、GPネットワークという取組のメンバーでもあります。

そもそもの開業時の広場の様子ですが、テーブル、椅子が既にあるような状態を作っても、なかなか人は座っていただけないという状態が、2年ぐらい続いたのですけれども。5年ぐらいをかけて、これは平日水曜日の朝9時半の様子ですが、隣に百貨店が面しているところなのですけれども、百貨店の営業時間前であっても、大きなイベントがなくても、平日朝から、このときは60人ぐらいいらっしゃっていますけれども、富山の人たちが日常的に広場に集うことを、自分の生活の中に取り組んだことを評価していただいて、今いろんな街の広場の開業時、サポートするような活動をしております。

やってきた取組は、とにかく何かをやっぱしないと、先ほどの長い綱というのもそういうものになるのだなということ、今学ばせていただきましたけれども。いろんな人が自由に遊べるような状態を常につくっていかうということで、大きなイベント

がなくて、外で遊んでいても、富山は非常に寒いところなので、風邪をひかない程度の気温のときには、毎日のように積み木を置いているような活動をしていました。そうしますと、積み木を媒体にして、全然知らない人同士が遊ぶという現象が、本当に毎日のように起きていまして、ここのいいところは、別々で遊んでいることもできるし、一緒に遊ぶこともできるというような空間のサイズを許容しておりますし、これは論文にもしていただいているのですけれども、名前も、所属も、住んでいる場所も知らないけれども、広場で会ったら何となくおしゃべりをする広場友達という人が、どうやらこの広場を媒体にして増えているようで、そんなことが生まれるためには、とにかく間に活動を置くことだと思っておりますし、この活動については、すごく地域性を反映すべきだと思っておりますし、その地域性とは何なのかというようなことを、地元の方に学びながら提案させていただいて、一緒に活動を起こすようなことをいろんな町でやっております。

まちなかに、中心市街地に私は関わらせていただくのですけれども、中心市街地活性化という言葉がありますとおり、にぎわい創出というところがミッションになることが多くて、にぎわいという言葉の定義は様々あるのですけれども、滞在人数×滞在時間の積算であるという整理もございます。

要するに100人の人が1時間いることと、10人の人が10時間いることは、同じ意味を成すということになるわけですが、政令指定都市である神戸市さんのような本当にたくさんの方が常にいらっしゃる場所ではなく、本当にいろんな街に関わる中で、少人数であっても、滞在時間を延ばすというような価値づくりを、地元の方とやっております。

そうしたときに、すぐ土日のことを考えることが多いのですけれども、実は平日のほうが日数的にも多いですし、平日の日中こそ生産人口の方が働いていらっしゃるの、実は人目に触れることが多いように考えております。

逆に言うと、平日の日中にはどんな人が滞在できるのかというところから考えまし

て、高齢者の方とか、子どもたちに行っていたような広場づくりを、状況をつくったという、皆様のすばらしい純粋な話と違って、私は非常に不純な動機で、子どもたちに関わるということ、非常に考えてきたのが、当時なのですけれども。今となつては、本当にまちなかに積極性を持って、幾つになつても関わりたいと思われの方の共通点が、まさに非常にいい思い出があることではないかということに気づけて、割と俊敏に、いろんな人に、もっと言うところから未来そのものである子どもたちに、まちなかに関わる機会づくりを、積極性を持って考えていきたいという活動をしております。

そういった中で、冒頭、市長の言葉にもありましたけれども、都心で安心して子ども手が離せるような居場所づくりということの1つとして、こういった広場づくりがございます。

富山では、平日の日中にとにかく遊びに来てねということ、県内の子どもたちに、富山市は富山県の真ん中に位置し、中心市街地で一番商店街が立派ということもあつたので、社会科見学のついでというようなことも含めて、遊びに来てねという御案内をしておりました。

こうしたところから、いろんな子どもたちが、年間今でも1万人ぐらいの子どもたちが、団体で施設ごとに遊びに来ていただいでいて、普通のお父さんお母さんとそれに来る子どもたちは、本当に毎日のようにたくさんいらっしゃいます。

1つ御紹介させていただきたいのは、ルイス・カーンという建築家がいらっしゃるのですけれども、都市とは小さな子どもが歩いていくと、将来一生をかけてやろうとするものを教えてくれる何かに出会うそんなところだという、すばらしい言葉を残しておりまして、富山の場合ではその地域の技術として、井波彫刻という彫刻がございまして、この彫刻に触れる機会を自主事業の中でつくってました。

本当に危険なものに触れることで、危険を感知する能力が育つと本当におっしゃるとおりだと思っております、あえて切れない彫刻刀ではなく、彫刻家の皆様が普段

用いている、本当に切れ味鋭い刃物が、もう本当に恐ろしい、大人でもびびるような彫刻刀を、一流の彫刻刀を持参いただき、子どもに触れる機会を作りました、あえて。

でも子どもはやっぱり素晴らしくて、これが危険なものだというのは、見た瞬間に感じて、この左下の子どもさんなんかは、汗びっしょりになりながら、真剣に恐々でも面白く、ちゃんと大人の専門家の方のサポートをしていただきながら、触れて無事ちゃんと手を切ることなく、事を終えましたけれども。やっぱり本物に触れるという機会は、どれだけ大切なことなのかということ、このときに非常に学びました。

また、いろんなまちにある造園屋さんの職業を紹介していただくような機会を作りました、造園屋さんがお庭を造る作業工程と一緒に体感するという、機会を作りました。非常に人に見られるというものの価値は、子どもだけではなく、大人にも子どもにも心をもう1回取り戻す機会になるのだなということを感じたのは、右上の写真が一番最初に造っていただいた庭園なのですが、数年後なんと、こんなに立派なものを造っていただけるようになりました。

やっぱり人に見られるということで、非常にわくわくして楽しくなっちゃったんですね。どんどんどんどん、手の込んだものをされて、さらにまちなかが面白いのは、この真ん中が、確か柿の木だったと思いますが、この柿の木が売れるということまで起きて、やっぱりまちの真ん中というのはいろんな人が往来しているので、いろんな関係性が作りやすいですし、その関係性が作れるためのきっかけづくりを、ソフトの面でどう具体的にプログラムの中に入れていくのかということを感じ、考えております。

何よりも、子どもに関わっていただくということは、本当に将来、まちのことを思う人を増やす機会、素地でもあると思っておりますので、未来への投資だと思って、いろいろ活動しております。

すいません、ちょっと体調崩しておりました、以上です。ありがとうございました。

○梶木座長      ありがとうございます。非常に、富山の事例ですけれども、どこの町

でも使えるような、考えられるような事例、事を教えていただいて、ありがとうございました。

ちょっと時間が大分、押しておりますけれども、ここから皆さんで、意見交換ということにしたいと思いますけれども、何かすごいお話いっぱい聞きましたが、どうでしょう。皆さんの中から、まず何か感想とか、あるいは自分の活動でちょっと課題に感じていること、まず感想から行きましょうか。時間があまりないので感想に行きましょうか。

じゃあ、澤井さんから。

○澤井氏 今日お話を聞いていて、外で遊びなさいと強制されている感じがすごくして、特に小学生。外で遊ぶのに気合いを入れないと外遊びができないのかなというのをすごく感じました。

私は40代で、兵庫区の下町で育ったのですが、公園ですごく子どものとき遊んでいて、ちょっと行けば会下山公園という、多分今より昔のほうが自然が残っていて、そこで秘密基地を作ったり、泥だんごを作ったりして、よく遊んでいたのですが。外で遊ばなければいけないという雰囲気じゃなく、自然に遊べる環境ができれば、取り戻すじゃないけど、必要なのかなと思いました。

例えば公園でも、整備され過ぎて、落ち葉や松ぼっくりが全部掃除されてなくなっていて、昨日までここに松ぼっくりを使って、松ぼっくり投げて遊んでいたのに、「えー」と掃除されて、何もない。そういうのがすごく多くて、何か松ぼっくりなんて、土に還る自然のもので、土にとっては栄養になるものなので、何か必要な物まで排除する必要はない、本当に自然のありのままの環境が戻ってくれば一番なのかなと、すいませんまとまりなくて、思いました。

○梶木座長 ありがとうございます。

豊永さんいかがですか。

○豊永氏 皆さんがすごくいろいろされているのに驚いて、ただただそうなんや、

そうなんやというふうに感じましたけど。市がやっているいろんな遊び場、いろんな方が活動されている取組、私、何ができるのかなとか、どうありたいのかなというのを考えています。

小さな地域の中でちっちゃいところで、もっと居場所があったらいいなというのを、今聞いて思ったのですけども、ちょっとそれから先に行きますね。そこには、今、私はちょうど十善寺という一王山さんのお寺の境内で茶屋をしているのですけれども、昔はお寺というのは、何か寺子屋をしていたと思うのですね。今、お寺で遊ぶ、社寺仏閣で遊ぶということが、やっぱりあんまりないような感じがする。

公園、学校のグラウンド、河原、もっとやっぱりその社寺仏閣というのを、行政のほうからも手を組んで、そこを開放できたら、今あるもののところからの広がり、小さく出てくるのじゃないかなというふうに、今、お寺の境内にいて、ずっと感じています。

守られているのですよね、見えない何かに。人の目じゃないのです。何か感じるのです。そういうところで、そういう自然の中とか、何か守られている、見えないものの中で遊ぶということが、何か今後変わっていくのかな。子どもの心に何か刻まれるものがあるのかなというふうに、自分自身もそうですし、もっと多分灘区も神戸市も、まちなかにも、きっと社寺仏閣あると思うのですよ。そういうところで、活動もできたらいいなと、皆さんがそれぞれに活動ができたらいのじゃないかなというふうに。作ることも、何かすることもすごく大事だとは思っています。でも、今あるものをどう活用して、何ができるのかというのを、考えていきたいなと思いました。

もう1つ、六甲山プロジェクトの一環として、私は茶屋をしているのですけれども、根岸真理さんが監修した「六甲山の茶屋ガイドマップ」というものを兵庫県に作っていただいて、つい先日、月見茶屋さんがもう閉店になったのですけれども、やっぱりそこに載っている茶屋が、六甲山系でも、今現在13の茶屋が明記されています。こういうちょっと郊外に離れたところで施設があるのではなくて、茶屋自身も協力しな

がら、六甲山にもっと行ってもらえる、自然の中にもっと入っていける。茶屋がそういうオープンスペースになってもいいなというのを、今思っています。

これぐらいですかね。

○梶木座長　ありがとうございます。神戸のお話をすると、やはり自然というので、海と山がすごく近いというところでいうと、その間に川もありますので、いろんな自然がすごく身近にあるというのは、すごく大きな私達の持っている財産だと思うんですね。

神社仏閣もということで、既にあるものをいかに使っていくかということも、やっぱり知恵の出しようだったりとかというところで、あとそこら辺はお互いに行政からの支援だったりというのも、全部が全部、行政ができるわけでもありませんので、やりたい人もいっぱいいるので地域の中で、そういう人たちの上手く力が出せるような何か政策があるといいなと思っています。

私は先ほどドイツと交流していると言いましたけれども、ドイツの仕組みの中でやっぱり地域でできることとか、NPOとか小さな団体でできることは、全部そっちでやって、行政はそこに任せて、支援をしていくというような考え方があるというので、しっかりとそういうところでやっておられる方も、食べていけるというようなこともすごく大事なことかなとも思っています。

今の2人ですけど、山下さん、何かありますか。

○山下氏　ありがとうございます。今、お寺のお話を聞いていて、今、都市計画では、15分都市という言葉が出てきています。

ステイホームの期間を私達経験して、自分が歩いて行ける15分圏内で、しっかり豊かに暮らしていくことの大切さを実感しまして、この15分圏内をもっともっと見直して、豊かにしていきましょうという取組なのですけれども。まさに檀家さんという言葉があるとお寺というのそういう圏域も作っているのだなということのを改めて意識できました、ありがとうございます。

あとは、先生が子どもは隙間で遊ぶのは得意だけど、隙間時間では遊べないのだよというお話がすごく印象的で。だからこそ、先ほどの冒頭の御説明の資料で一番ショックだったのは、私も実は今は神戸在住なのですけれども、富山の事例ばかりで先ほど分かりやすくするために、ここに出しましたが。体力がすごくないというのは、時間はかけているのに体力がないというのは結構ショックなデータで、やっぱりプログラムでしっかりと隙間時間じゃない遊ぶということを、主目的できるようなプログラムづくりが、体力のためにも、本当に基礎体力、子どものうちに作らないと。この間20代前半の若い方々と一緒にまち歩きをしたんですけど、私もう50なんですけど、私のほうがよっぽど歩いて、すぐ疲れちゃうのですね。1時間も歩けないというのがすごくショックで、やっぱり子どもたちのうちから、しっかり遊ぶということをすごく実感させられた状況でした。

最後に、この間あるまちで花火を見るという機会を得ました。先ほど、どなたかがおっしゃっていた、大人が楽しく遊んでいる様子を見て、子どもは楽しく遊ぶというお話があったかと思いますが、花火も同じなんだなということを実感しました。

子どもたちだけで来ているグループは、何と花火が目の前に数年ぶりに上がっているのに、持参したゲームで遊んじゃうのですね。だけど、お父さん、お母さんと一緒に、あとはほかの大人と一緒に見ている人は、大人が花火で「たまや」とか言って、はしゃいでいるのを見て、まねして遊ぶのですね。ずっと花火を大人が楽しんでいる間は、子どもたちもちゃんと花火をずっと楽しんでいたもので、やっぱり遊ぶということも、まねる、学ぶということで、大人と一緒に過ごすことで、遊びも築かれていくのだなということを実感した出来事でした。

以上です。ありがとうございます。

○梶木座長　　ありがとうございます。本当に大人自身も、遊ばないと老けてしまうというようなことを言われるように、遊び心というのはどの世代にもすごく大事な事かなとは思っています。

私、先ほどからお話を聞きながら、こちらのお2人のお話を聞いて、遊ぶ場所の何か新しく作らなくていいのですけれども、子どもたちが体力じゃなくて、体を発達させるためには、やはり斜面だったり、でこぼこなところだったりというので、真っ平らな校庭で遊ぶよりは、やはりでこぼこのところを駆け巡るとか、斜面でこう、さっきの斜面すべりは好きだけどそのためには登らないといけないという、そこを坂道を走って上がるとか、そういうようなことというのは、やっぱり運動の中ではなくて、遊びの中でしか得られないようなところなのですね。

大人になると、わざわざ斜面を走ろうかなと、そんなに運動じゃないとしないのですけど。子どもはやっぱりやってみたいということが一番の動機になって、そういうところも走ったりということがありますし。木登りだったり、石垣をこう登るというのも、すごく全身を使っている運動で、危ないから禁止ということが多いんですけれども、それをするによって全身を扱って行って、全身バランスよく発達するということがやっぱり一番、ちっちゃい時期には、特に小学生期、子どもの体が育つと言われている時期には、大事な遊びなのかなと思います。

特にですね、澤井さん、森のようちえんで、幼稚園まではそうやって育てたのに、小学生で小学校に渡した途端に、そういうのが違うことになってしまうのですよね。そこらあたりの事例というのは、いかがですか。

○澤井氏　よく卒園児の保護者から聞く話で、小学校に上がると遊ぶ時間がない。ましてや外で遊ぶ場所がないというのをすごくよく聞きます。

海とかも近くに、須磨ならすごくそばなのであるのですけど。海で遊ぶのは校則違反とか、何か禁止事項がすごく多くて、多分昔は自由に行って遊んでいただろうなと思うのですけど。何かそこを全て禁止してしまうのじゃなくて、地域の温かい目だとかそういうところで補って、遊んでいけないかなと思います。

○梶木座長　ありがとうございます。海は行ってはいけないと、子どもだけでは行ってはいけないというふうに言われているというのは、いろんな調査でも出てきます

けれども。でも結局その一番の自然の豊かな、砂遊びなんかでもし放題のところまで遊んでいないというのは、すごく残念なのですけれども。そういうのをいかに使っているかというのを考えていくのが、今回のこのフォーラムですごく大事なところかなと思いますので、こういうところに行けている子どもたちは、すごくいろんなものを体得しているのですけれども、そのそれ以外の子どもたちですよ。

ましてや、学校で遊び場をやっていると、不登校の子どもたちは学校には行けていないというようなこともありますので、全ての子どもたちにということを、やはり我々は考えていかなくちゃいけないのかなと思いますので、次回以降、そういうことを議題にしていきたいなと思っています。

お2人から何か、皆さんの活動を聞かれたりで、何か御意見とか、御感想とかありましたら。

○丸山副局長　皆さんの活動の内容を聞かせていただいて、やっぱり行政で居場所を確保しているのは、屋内とかいうところがやっぱり多いんですけど。皆さんはそれぞれの地域のいいところを使い、自然とか飛んでくる蝶ですとか、あるものとか神社仏閣、地域のものをうまくその周りの大人の方が、子どもさんを導いたり、子どもさんが発見したものから、何か探求できるようなところの機会を作って、環境というか機会を作っていらっしゃるなというふうに感じました。

1つ危険回避のところとかで、ちょっと聞きたいなと思ったのが、澤井さんがされているすまっこのもりの焚き火の火で、火を自分たちでつけたり、火を守るとか、普通だったら大人が危ないから寄っちゃだめとかする、一番の分かりやすい例かなと思ったんですけども。それを体験する、させるというか、してもらうときに気を付けるということとか、声かけとか、規制しない言葉かけみたいなことがあったら教えていただきたいなと思うんですけど。

○澤井氏　基本、本当最低限しか言わなくて、来ていただいたときも焚き火台の周りに囲いをしていて、そこから中にはちょっと入らない。なぜかという、衣服に飛

んできて火が移ったりするかもしれないからという、本当それだけしか伝えない感じ  
です。

あとは実際子どもたちがやっていて、ちょっと危険だなと思ったことがあったのは、  
落ち葉とか枝を入れたいのですね。山ほど入れて、そこで火をつけると、すごい火柱  
が上がって、上にちょっと枝もあつたりして、危なかったなど。じゃあ次どうしたら  
いいという、子どもたちが実際に学んで、さすがに燃え移るまでには、大人が配慮し  
て止めたりはするのですが。多少の危険というか、怪我しない、人に迷惑をかけな  
い程度は、もう本当に子どもたちに任せて、子どもの力を信じて任せて、実体験する  
のが一番だなと。そんな感じで、すいません。

○丸山副局長　ありがとうございます。もう1点、親御さんの反応というか、感想  
はどんな感じなのでしょう。

○澤井氏　やはり親なので、私も自分の子が初めて包丁を使うというときは、すご  
くドキドキして、この間も親子クラスで、2歳の子が初めて包丁を使いますという場  
面があったんです。お母さんは、後ろから一緒に持って一緒にするよとすごく言っ  
て、2歳だとイヤイヤ期なので、「私がする、お母さんは来ないで」と、すごい振  
り回していたのですね。

私は自分の子のときも経験したし、この森のようちえんでいろんな子を見て経験し  
たので、お母さんちょっと待ってあげてと言って、私、前に座ってお母さん後ろでち  
よっと待っててと言って、危なかったらこう入るので、ある程度子どもにやらせてみ  
てと言って、そしたらその子、上手いこと初めてなのですけど、包丁を斜めに使わな  
くて、まっすぐ下ろしたのですね。これはいけると思って。

何かやっぱり実体験ですね。私がこういうふうに援助というか、補助したというの  
をお母さんに見ていただいて、次からは、ああいう対応がみたい。親と子だとなか  
なか、子どももお母さんに甘えるので、私がやっていけたところも、お母さんには通  
用しないところもあるのですが。そんな感じで、そんなにお母さん、止めなくても

というのを感じてもらうようにはしています。

○丸山副局長　ありがとうございます。

○梶木座長　親だと、どうしても先回りして、子どものためにと行って、本当子どものためになっているのかというのがいっぱいありますけれども。その気持ちも分からないでもないのですけども、そういうときに澤井さんのような存在の人が、遊び場だったらプレーリーダーという存在がいるということが、子どもたちの次の成長につながっていくのかなと思います。

芝田さん、いかがでしょう。

○芝田次長　たくさんの資料を見せていただいて、今思っているのは、なんと写っている子どもたちの表情が、本当に満たされている顔をしてるなというのを、見ながら。私はここ30年以上、小学校の教員をしてきましたので、何かちょっと罪悪感に、少しさいなまれております。ただ、私が長年ずっと教師をしてきて思っているのは、昔の子どもも、今の子どもも、私は変わらないと思っているのですね。変わっているのは、環境が変わってきている。何も環境のせいにするわけでは全くないのですけれども、環境が変わり、そして価値観、いろいろな方の考え方が変わってきているところは大きいのかなと。

ですので、小学校でも休み時間になると、たとえ10分の休み時間でも、必死で運動場をめがけて走っていくのですよね、子どもたちは。そして汗いっぱいかいて帰ってきて、授業が始まるという。大人から見るとそんな短い時間も行かんでもいいやんというふうに思うこともあるのですけども、やっぱり子どもたちは遊びたい。

ただ、これが全員ではないので、やっぱり全ての子どもたちを遊ばせたいという、またこれも教員のさがないが、そういう中で、クラスみんな遊ぶ時間を作ろうとすると、先ほど澤井さんもおっしゃっていましたが、ちょっと遊びを強制しているようなところも、どうしても出てくるので、そのあたりが難しいところかなというふうにも思っています。

そして、なぜ子どもたちが遊ばないのかという話で、最初に先生のお話がありましたけど、時間がないというのは、本当にそのとおりだなと。退屈になれば必ず生み出してくるものというのは、子どもたちはあるのですけど。でもそれが退屈なので、ついつい目の前にあるゲーム機に手が伸びていっている。それがなければきっといろいろな発想も生まれてくるのじゃないかなというふうには思っていますので、逆に場を用意しすぎることが、子どもたちにとっては、いろいろな制限をかけていってることなのかもしれないなというふうにも、改めて感じた次第です。感想だけで申し訳ございません。

○梶木座長      ありがとうございます。小学校で20分ぐらいの休み時間はありますよね。

○芝田次長      はい。

○梶木座長      今は縄跳び遊びの時間でバーッと皆出て行って、縄跳びが終わった後、先生たちに子どもたちが今から自由に遊んでいいと聞いていましたので。縄跳びは遊びじゃなくて、あれは縄跳びだったなと思ったのが。割といろんな小学校で行われていることですよ。

○芝田次長      そうです。

○梶木座長      豊永さんどうですか。最後に一言、いいですか。

○豊永氏      大丈夫です。

○梶木座長      では、市長どうですか。何か。

○久元市長      もう時代がどんどん変わるので、自分が子どもの頃はこうだったのでこうだということは、なるべく言わないようにしているのですけれども。私も澤井さんと同じように、新開地の近くで生まれ育って、遊んでいたのは湊川公園と、会下山公園でしたよね。会下山公園は、何の手入れもしていませんでしたよ、役所は。ほったらかしで、いっぱい子どもが遊んでいましたよね。

それから鈴蘭台に引っ越しに行って、そのときはまだ自然がいっぱい残っていたの

で、遊んでいたのは、かなり神社の境内でドッジボールをしたり、山の中に入ってカブトムシを採ったりして遊んでいたわけですね。

しかし、芝田さんがおっしゃられるように時代の環境が変わって、そんな子どもたちが自由に遊ばせないようにしているというのは、これは価値観の判断があるかもしれないけれども、いい悪いの判断があるかもしれないけれども、そういうニーズというのが、やっぱりあるのだと思うのです。だから、カミカ茶屋の存在というのは知っていて、私はたまたま時間が空いたので、お邪魔してお話を聞かせていただいて、教えていただいたのは、子どもたちが学校の帰りに寄りますよという話でしたよね、さっき。それが、学校はちゃんと家に帰るように指導しているのと違うんですか言ったら、いや全然ランドセル持ったまま来ますよという話を聞いて、それはそれでいいことかなと思ったのですけど。同時に、教育委員会もそういうふうに指導している、必ず学校から家に一旦帰りなさいと。それから小学校区の外へ出たらいかんことになっているのと違うの。

学校の判断で。そこはやっぱり、そういうような保護者の意向とか、考え方があるから、教育委員会もそういうことをしているわけでしょうね。だから、それはいい悪いの判断ではなくて、子どもの存在というのは変わらないけれども、しかし環境が変わる、保護者の意識も変わるということの中で、子どもたちが今置かれている状況を客観的に見て、こういう今日話があったのだとしたら、より一層いろんな多様な意見を取り入れながら、子どもたちの場所を、身近につくっていく。

身近につくっていく中で、こべっこランドのような非常に立派な施設を、市内1か所作る事も大事で、それ以外の施設を作りますけど、まさに山下さんがおっしゃったのですか、15分圏内に安心して遊べる場所をどう作っていったらいいのか。昔みたいにほったらかしで、もう自由に子どもたちが遊びまわれるというような時代ではない。それを許容する時代がないとするならば、どうしたら、例えば15分圏内で、神社仏閣の活用も含めて、安心して遊べる場所というのを、どうたくさん作っていった

らいいのかというようなことも、この2回目、3回目で議論していただければありがたいかなというふうに、感想ですけれども感じます。

○梶木座長　ありがとうございます。私が先週ちょっと東京で見てきた小学校なんですけども、昭島市の光華小学校というところは、東京都の事業で校庭でプレーパークというのを作っていて、そこで焚き火もします。ハンモックだったり、モンキーブリッジだったり、木登りだったりというので、その時間は先生が見るのではなくて、シルバーの人材の人が来られていてということで、もういっぱい子どもが校庭で遊んでいて、学童の子どもたちもそこで遊ぶし、外の学童の子も来るし、保育所の子も来るしというので、すごい子どもたちが、寒い中でも半袖でいっぱい遊んでいましたので、何かいろんな選択肢が増えるというのは、すごく地域の中で大事だなと思いました。

でも小学校でも、それだけやろうと思えばできるのだなという事例もありますので、小学校だから焚き火ができないわけではないですし、周辺状況が許せば、そういうことも学校の中でも可能になってくるということで、学校もどんどん変わっていったらえたら、徒歩圏15分圏の中に学校は、小学校はあると思いますので、いろんなところが使えるといいかなと思います。

そういう意味で、次回のフォーラムでは、外遊びの安全な居場所づくり、学校、行政、地域、NPOなどの役割とか連携について議論を深めていきたいと思っています。よろしいでしょうか、皆様。次回に向けて何か抱負とか。

豊永さん、どうですか。何かこう言っておきたいなということがあれば。

○豊永氏　私ではどうにもできない、さっき学校に行かないとか、行けない選択肢を持った子どもたちとの声かけみたいなものができたら、例えばこういうところに行くと、何か誰が受け入れるわけでもなくて、場所の提供というか、こんなところがあるよということ、やっぱり私は、誰が学校に行って、誰が学校に行かないか、誰が遊んで、誰が遊んでないかというのは分からないのですね。やっぱりそのあたりで、

直接じゃなくても、そういう連携が取れるといいなと思っています。

○梶木座長　不登校の子どもの問題というのは、非常に大きいと思いますので、やはり神戸市でも、ある一定の割合はいろんなところに子どもたちが学校に行けてない場合があると思いますので、そういう子どもたちもしっかりと体も育っていてもらいたいので、そういう議論もぜひ含めてできればなと思います。

山下さん、次回に向けて何かありますでしょうか。

○山下氏　ありがとうございます。先ほど、先生の許すという言葉が、実に響いて、15分圏内に、要するに御近所に住む人同士がお互いを許し合えるような状況づくりを、本当に私も考えていかなきゃなということを思いながら、拝聴しておりました。

そういう意味では本当に奥幅広い本当にお題で、お話を聞けば聞くほど悩んでいると言いましたけれども、皆様とまた御議論できることを楽しみにしております。

感想ですいません。以上です。

○梶木座長　ありがとうございました。子どもは本当に私達の未来ですから、神戸で子どもたちが健やかにという、なんか簡単に言ってしまうと健やかにもちょっと薄っぺらな言葉になってしまいますけれども。楽しく人生を歩んでもらいたいというのが、本当に切なる願いですので、そういう楽しい大人が増えて、楽しい子どもが増えるというようなお話もありましたので、そういう仕組みづくりだったりとかということ、今度また議論できていけば、私達は何を目指すのかということも含めてお話を深めていきたいなと思います。

では、お時間にそろそろなりますので、本日予定していた議事については終了させていただきます。ありがとうございます。

事務局に戻させていただきます。

○久元市長　どうもありがとうございました。

○江坂課長　そうしたら、第1回のフォーラム、閉会とさせていただきます。

皆様、本日はどうもありがとうございました。また2回目以降、よろしくお願いい

たします。

閉会 午後 12 時 00 分